

『三玉挑事抄』注釈 秋部（上）

岩 坪 健

本稿は『三玉挑事抄』秋部の138番から199番までを掲載する。担当者はすべて本学博士課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（ ）内には、担当者の氏名を示した。

森あかね・風岡むつみ・平石岳・劉野・加藤森平・呉慧敏・大杉里奈・廣瀬薫

凡例

一、翻刻は原文のままを原則として、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

- 1 句読点を付け、会話文などは「」で括り、底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改めた。
- 2 誤写かと思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記した。
- 3 和歌の上に、通し番号（138～199）を付けた。

一、「[出典]」の欄には、和歌と注釈本文の典拠を示す。和歌には『新編国歌大観』の歌番号（万葉集は旧番号のみ示

す)を記すが、無い場合は「該当歌ナシ」と表記し、『三玉和歌集類題』にあれば部立などを示す。注釈本文が『新編日本古典文学全集』(小学館。略称『新編全集』)、または『新釈漢文大系』(明治書院)に収められている場合は、そのページ数も記載する。ただし『新釈漢文大系』の白氏文集で未刊の巻は、続国訳漢文大成『白楽天全詩集』による。

一、「異同」の欄には、翻刻本文との異同を列挙する。ただし、濁点や送り仮名の有無、漢字と仮名の相違、仮名遣の相違は取りあげない。和歌の本文は『新編国歌大観』と、注釈本文は原則として版本と、それぞれ比較する。異同がない場合は「ナシ」と記し、ある場合は『三玉挑事抄』の本文―異文の順に列挙する。複数の作品すべてに異同がない場合は、書名をまとめて列挙して、末尾に「ナシ」と記す。

○源氏物語は、絵入り承応版本(略称『承応』。国文学研究資料館のホームページに公開)と、北村季吟『源氏物語湖月抄』(略称『湖月抄』。『北村季吟古註釈集成』新典社を使用)による。

○伊勢物語・大和物語・枕草子・古今集序・八代集・和漢朗詠集は、『北村季吟古註釈集成』(新典社)による。

○竹取物語は絵入り版本(無刊記版。同志社大学所蔵)による。

○うつほ物語は文化三年(一八〇六年)補刻本、狭衣物語は承応三年(一六五四年)版本により、いずれも三谷栄一『平安朝物語板本叢書』有精堂を使用する。

○漢籍も同志社大学に版本がある場合は、それを用いる。ない場合は『新釈漢文大系』などによる。

一、「訳」の欄には翻刻本文の現代語訳、「考察」の欄には和歌と典拠との関係など、「参考」の欄には参考資料などを記す。

一、歌題が同じである和歌が連続する場合、底本では二首めからの歌題は省略しているが、本稿では「訳」に限りすべての歌に題を示した。ただし補足した歌題には（ ）を付けて、底本にはないことを示す。

秋部

新秋露

138 仙人のたふさにくるためしをも君にはしめの秋の白露

文選。斑固、西都賦曰、抗_テ仙_ノ掌_ヲ以承_レ露_ヲ。

漢武故事曰、上作_ニ承露盤仙人掌_ヲ。擎_ニ玉_ノ盃_ヲ以取_ニ雲表_ノ之露_ヲ。和_ニ玉屑_ニ服_レ之_ヲ求_ニ不死_ヲ云云。

〔出典〕雪玉集、九〇九番。文選（賦篇）上、西都賦、四四頁。漢武故事。

〔異同〕『新編国歌大観』「たふさにくる―たふさにつる」「君にはしめの―君にはじめて」。『文選』ナシ。『漢武故事』「上作_ニ承露盤仙人掌_ヲ。擎_ニ玉_ノ盃_ヲ―上於_ニ未央宮_ニ、以_レ銅作_ニ承露盤_ヲ。仙人掌擎_ニ玉杯_ヲ」「和_ニ玉屑_ニ服_レ之_ヲ求_ニ不死_ヲ―擬_レ和_ニ玉屑_ニ、服_以求_レ仙_ヲ」。

〔訳〕 新たな秋の露

仙人が掌_{（てのひら）}で（露を）受けたという例はあるが、あなたに今年最初の秋の白露を（ささげよう）。

文選。班固の西都賦によると、天に向かって仙人の掌をおしあげて甘露を受ける。

漢武故事によると、帝は承露盤を作った。仙人は掌で玉の盃を捧げもち、雲の表面の露を取る。それを玉の粉と混ぜ合わせて飲み、不死を求めた云々。

〔考察〕前漢の武帝が神仙境を模して造営した宮殿において、不死の薬を作らせた故事による。

〔参考〕『漢武故事』の本文異同には、竹田昇・黒田真美子編『中国古典小説選 穆天子伝 漢武故事 神異経 山海経他』（明治書院 二〇〇七年）を使用。『円機活法』の巻二、露にも『漢武故事』を引くが、「和玉屑服之求不死」を欠く。

（森あかね）

新秋雨

139 秋はまたきのふけふかの桐の葉のつれなき色に雨おつる声

白氏文集、長恨歌。秋雨梧桐葉落_ル時。

〔出典〕雪玉集、三一七一番。白氏文集、卷一二、長恨歌、八二三頁。〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕新秋の雨

秋はまだ昨日か今日、始まったばかりで、いつもと変わらない色をした桐の葉に雨が落ちる音がする。

白氏文集、長恨歌。秋雨の中、梧桐の葉が落ちる時。

〔考察〕「長恨歌」は、玄宗皇帝が亡くなった楊貴妃を偲ぶ箇所。

〔参考〕類歌「人は来ず掃はぬ庭の桐の葉におとなふ雨の音のさびしさ」（建保二年（一二二四）内裏歌合、十七番、秋雨、源通具）。

（風岡むつみ）

都早秋

140音羽山けさ吹かせや都にはまた入た、ぬ秋を告らむ

〔出典〕雪玉集、六八〇四番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 都の秋の初め

音羽山に今朝吹く風は、都にはまだ訪れていない秋の到来を告げているのだろうか。

〔考察〕出典は141番歌に同じ。『湖月抄』の頭注に「松虫の初声さそふ秋風は音羽山より吹きそめにけり」（後撰集、卷五、秋上、二五一番、よみ人しらず）を引くように、音羽山は秋を告げる山として詠まれた。

（平石岳）

残暑

141秋かせそまた入た、ぬ涼しさの音羽の山や行てたつねん

椎本卷云、七月はかりになりにつけり。都にはまた入た、ぬ秋のけしきを、まきの山辺もわつかに色つきて云々。

〔出典〕雪玉集、七七七七番。源氏物語、椎本卷、一七八頁。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『承応』『湖月抄』「秋のけしきを―あきの気色を、音羽の山近く風の音もいとひや、かに」。

〔訳〕 残暑

（都には）秋風はまだ吹いていない。音羽の山に行き、涼しさを探してみようか。

椎本の卷によると、（薫が、久しく訪れていなかった宇治の八の宮を訪ねてみると）もう七月ごろになっていた。都にはまだ訪れていない秋の気配を、（宇治川に近い）槇の尾山のあたりもかすかに色づいてきて云々。

〔参考〕『古今集』に詠まれた音羽山は、京都市山科区（山城国と近江国との国境）にある音羽山と考えられる。しかし、六波羅探題の設置に伴い、京都市東山区の音羽山が交通の要所（所謂「渋谷越」）になり、中世・近世においては後者が音羽山として認識されていた、と指摘されている（奥村恒哉「歌枕『音羽山』について」、鹿兒島県立短期大学紀要 人文・社会科学「三〇号、昭和五六年一月）。

（平石岳）

早秋

142 来る秋もおなし宿りそ一葉ちる枝にのみ住鳥もこそあれ

格物論。鳳ハ瑞ニ応レ鳥、太平ノ世ニ則見ル。非ニ梧ハ桐ニ不レ栖。

〔出典〕柏玉集、六三〇番。『円機活法』卷二十三、飛禽門、鳳凰。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『円機活法』「太平ノ世―太平之世」―則見ル。―則見ル。其ノ為テ形コト、鶏頭、蛇頸、燕頤、龜背、魚尾、五彩ノ色アリ高サ六尺許。

〔訳〕 早秋

一葉が散る（桐の）枝にしか住まない鳥もいるが、（その鳥は）巡って来たこの秋も同じ枝に宿ることだ。

格物論。鳳凰は人間の良い行為に応じて現れるめでたい鳥で、太平の世に現れ、梧桐以外の木には宿らない。

〔考察〕「一葉ちる」は「一葉落テ而天下知レ秋」を踏まえる。133番歌および143〜145番歌、参照。

（廣瀬薫）

初秋露

143 天の川とわたるかちの雫より一葉の露もちりやそふらん

〔出典〕雪玉集、七七九六番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 初秋の露

(七夕の夜、) 天の川を渡る舟の櫂から滴る雫を受けて、一枚の葉に結ぶ露も(いつもより)多く散るだろうか。

〔参考〕 出典は145番歌に同じ。

初秋風

144 朝毎にさそ吹そはん秋風をいかにおとろく一葉成らん

〔出典〕雪玉集、七七九五番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 初秋の風

朝ごとにさぞかし吹きつゝのる秋風に(季節の移り変わりを感じて)、一枚の木の葉はどれほど驚いているだろうか。

〔考察〕 出典は145番歌に同じ。当歌で「一葉」が「おとろく」のは、秋が深まり風が強くなると吹き飛ばされてしま
うから。

萩

145 秋は来ぬ一葉のうへの風よりも心にもろき萩の音かな

淮南子、出于夏部。

〔出典〕 柏玉集、六五七番。〔異同〕 『新編国歌大観』 ナシ。

〔訳〕 萩

秋が来てしまった。（「一枚の葉が落ちて、天下は秋を知る」とされる）木の葉に吹きつける風よりも、心にはなかなか聴こえる萩（の葉の上を吹き過ぎる風の）の音だなあ。

淮南子、夏の部に出る。（133番歌、参照）

〔考察〕 当歌は133番歌の『淮南子』「一葉落_テ而天下知_レ秋」を引き合いに出し、それ以上に秋を感じさせるものとして萩が風にそよぐ音を挙げる。

〔参考〕 「秋はなほ夕まくれこそただならね萩のうは風萩の下露」（『和漢朗詠集』上、秋、秋興、二二九番、義孝少将）。

（加藤森平）

江萩

146更ぬるか入江の萩の花の色も白きをみれば月のしたかぜ

琵琶行。潯陽ノ江ノ頭リニ夜送_レ客ヲ。楓葉萩花秋瑟瑟々。主人下馬ヨリ客ハ在_レ船。举_レ酒欲_レ飲無_ニ管絃_一。酔_テ不_レ成_レ歎_ヲ。惨_ニ将_ニスレ別_レ。タル、時茫茫々トシテ江浸_レス月云云。

〔出典〕 雪玉集、九九六番。白氏文集、卷一二、琵琶引、二七七頁。

〔異同〕 『新編国歌大観』 ナシ。『白氏文集』 「琵琶行―琵琶引」 「瑟瑟―索索」。

〔訳〕 入江の萩の花

夜も更けたのかなあ。月に照らされて入江の荻の花も白いのを見ると、荻の葉に風が吹いていることよ。

琵琶行。潯陽の長江岸辺で、夜、客を見送った。あたり一面、紅葉と白い荻の花の穂がさわさわと風にそよぐ、もの寂しい秋景色である。主人は馬を下り、客は船中において、酒杯を挙げて飲もうとするが、酒に伴う管絃の調べもない。そんな酒は、酔っても一向に楽しくはなく、傷ましい気持のままいざ別れようとしたが、その別れの時、果てしなく広がる長江は、昇ったばかりの月をその水面に浸していた云々。

〔考察〕「荻の花の色も白き」とは、秋に咲く荻の花の穂のほか、月光も秋も白いという意味。秋は五行思想で白色に配する。

乞巧奠

(呉慧敏)

147 舶主ほしまつる庭の灯九重にあひあふ数も空にしるらし

乞巧奠。江次第曰、立ス黒漆燈スリ台九本ヲ於件ノ机ノ四方四角中央ニ加テ打敷、謂内蔵寮供ニ御燈明ヲ云云。

〔出典〕三玉和歌集類題、秋、星夕灯花。江家次第（神道大系）、卷八、七月、七日乞巧奠事。

〔異同〕『三玉和歌集類題』「乞巧奠―星夕灯花」。『江家次第』ナシ。

〔訳〕 乞巧奠

七夕の星を祭る庭の灯は九本あり、空で出会う（星の）数が自然に分かるように、宮中で出会う（人の）数も自然に分かるだろう。

乞巧奠。江家次第によると、黒塗の灯台九本をその机の四方四角と中央に立てる。打敷を敷き、これを九枝灯

と言う。内蔵寮が灯明を捧げる云々。

〔考察〕当歌は「九重」に宮中と九枝灯、「空に」に天空にと自然にの意味を掛ける。

(劉野)

148たへかたき契をやおもふかすことも二のほしの中の細緒は

紅葉賀巻の詞、夏の部にしるし侍り。

江次第曰、乞巧奠、東北ノ机。自御所ニ申_下第一張ヲ、置_三東北西北等ノ机上ノ北ノ妻_{延喜十五年例用和琴}、立_レ柱有_三三様_一常_ニ用_三半呂半律_ヲ秋ノ調子也。

〔出典〕雪玉集、七四九二番。江家次第(神道大系)、卷八、七月、七日乞巧奠事。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『江家次第』「東北ノ机自御所」東北机、同上、但、自御所。

〔訳〕(乞巧奠)

(七夕に) 供える筈の琴は中の細緒が切れやすいが、その琴も二つの星の仲の(年に一度しか会えない)堪えがたい逢瀬を思っているだろうか。

紅葉賀巻の詞。夏の部に記してあります。(132番歌、参照)

江家次第によると、乞巧奠、東北の机。御所より第一張りを申し受けて、東北や西北などの机の上の北の端に置く。延喜十五年の例では和琴を用いる。琴柱の立て方には三様あり、常に半呂半律を用いて、秋の調子である。

〔考察〕当歌は「たへがたき」に絃が切れやすいと我慢しにくいを、「なか」に中(の細緒)と仲を掛ける。

〔参考〕「七夕は今日貸す琴は何ならで逢ふにのみこそ心ひくらめ」（六百番歌合、乞巧奠、三一七番、有家）。

織女契久

（大杉里奈）

149天の川すめるを空のはしめより幾世をうつすほし合の影

神代卷曰、其ノ清陽者、タヤヒイテ薄靡而為_レ天ト。

〔出典〕雪玉集、九八二番。日本書紀、卷第一、神代卷上、一九頁。〔異同〕『新編国歌大観』『日本書紀』ナシ。

〔訳〕 織女の契り、久し

天地が分かれて空が出来た当初から、澄んだ天の川に輝く二つの星の出会いとまを多年にわたり（たらいに）映すこと
だなあ。

神代卷によると、その澄んで明るい気が薄くたなびいて天となる。

〔考察〕『日本書紀』は、神代卷の冒頭、天地開闢を語る箇所。488番歌、参照。「星合」は、陰曆七月七日の夜に牽牛星と織女星が会おうこと。七夕の空の風情を盪の水に映す風習があった。

〔参考〕「めづらしくあふたなばたはよそ人も影みまほしき物にざりける」（伊勢集、八三番、七月七日たらひにみづいれて影みるところ）。「天河影をやどせる水かがみたなばたつめのあふせしらせよ」（惠慶集、一〇番、七月、たなばたまつりして、たらひに水いれてかげ見る）。

（風岡むつみ）

霧織女帳

150 あまの川君きまささん秋霧のとはりも誰を待とかはしる

催馬楽、我家。わいへんは、とはり帳をもたれたるを、おほきみませ、むこにせむ。下略。

〔出典〕雪玉集、九八四番。催馬楽、我家、一五三頁。〔異同〕『新編国歌大観』『梁塵愚案抄』ナシ。

〔訳〕霧は織女の帳

天の河を越えてあなたに来ていただきたい。帷とばりのような秋霧も、誰を待っているか知っているだろうか。

催馬楽、我家。私の家は、帷帳いぢょうも垂れているので、皇族さまも来てください、婿を迎えよう。下略。

〔考察〕「我家」は寢殿に帳を垂らすことで、婿を迎える準備をした女性の歌。当歌はこれを踏まえ、七夕のころにかかると秋霧を帳に見立て、織女が牽牛との逢瀬を期待する気持を詠んだもの。

〔参考〕本文異同には元禄二年（一六八九）版『梁塵愚案抄』（早稲田大学古典籍総合データベース）を使用。

（平石岳）

七夕草花

151 花はなを時こそ有けれ七夕のにしきのひもは只一夜のみ

允恭天皇紀曰、天皇聆ニ是歌ニ則有感情而歌之曰、

佐瑳羅ササ餓多迹ガタニ之シ积能臂毛ヒモ弘等ワタ积舍キサケ帝阿麻テ哆ハ絆ハ泥受迹トタ多タ儂ヒト比等ヒト用能未ヨシ

〔出典〕雪玉集、九五四番。日本書紀、卷一三、允恭天皇、一一八頁。〔異同〕『新編国歌大観』『日本書紀』ナシ。

〔訳〕七夕の草花

どの花にも（蕾つぼみが開く）時があるのだなあ。七夕の錦の紐は（一年で）ただ一夜しか解かれないが。

允恭天皇紀によると、天皇はこの（衣通郎姫の）歌をお聞きになり、感動して歌を詠まれて仰せられるには、細やかな模様の錦の紐を解き開いて、幾晩でも共寝したいものだがそうもいかない。ただ一夜限りだ。

〔考察〕『日本書紀』は允恭天皇が衣通郎姫のところを訪れ、和歌の贈答をする場面。天皇は、衣通郎姫の姉である皇后（忍坂大中姫）の嫉妬心を気にしている。当歌はこれを踏まえ、七夕の牽牛織女の一夜の逢瀬を天皇と衣通郎姫になぞらえたもの。「紐解く」には花の蕾が開く、という意味もある。

〔参考〕本文異同には寛文九年（一六六九）版『日本書紀』を使用。

七夕木

（平石岳）

152あまの川うき木の道の絶さらはいまも見てしかほし合の空

博物志曰、天河与_レ海通、海浜年々八月有_二浮槎_一往来。不_レ失_レ期_ヲ、博望侯張騫乃多齎_二粮食_一乘_レ槎_ニ、而去忽不_レ覺_二昼_一夜_ヲ奄_至一_ニ一_ニ。見_二城郭居室_一、望_二室中_一多見_二織婦_一見_二一丈夫牽_レ牛_ヲ渚次_ニ飲_レ之_ニ云云。

〔出典〕雪玉集、九五七番。祖庭事苑、卷三、靈槎。

〔異同〕『新編国歌大観』「いまも見てしかーいまもみてしか_{（ま）}」。『祖庭事苑』「不失期―不失信」「而去忽―而去忽忽」。「望室中多見織婦見―室中多織女唯」「牽牛渚次飲之―牽牛臨渚不飲」。

〔訳〕七夕の木

天の川に浮かぶ筏の道が絶えていなければ、今も見てみたいものだ。二つの星が出会う空を。

博物志によると、天の川と海は通じていて、海浜は毎年八月、筏が浮かんで行き来する。その時期を狙って、

博望侯張騫が多くの食糧を賜り、いかにに乘せて去ると、たちまち昼夜がわからなくなり、たちまちある所に至った。城郭や部屋を見渡し、室内を見ると、多くの機織り女を見た。ある青年が牛を岸辺に牽いてきて、次に水を飲ませるのを見た云々。

〔考察〕当歌の「てしか」は願望を表わし、張騫のように自分も見てみたい、という意味。張騫が天の川に到達したという伝承は、『源氏物語』では「浮き木に乗りてわれ帰らん」（松風卷、四〇七頁）に見られる。

〔参考〕張華著『博物志』の原本は、三世紀末に完成したと推定される。『円機活法』や『百子全書』（一八七五年刊）に収められた『博物志』とは本文がかなり異なる。『祖庭事苑』は南宋の禅宗の辞典で一五四年重刊。本文異同には、正保四年（一六四七）版（国立国会図書館所蔵）を使用。

（廣瀬薫）

七夕管絃

153 けふにあへはこれも願ひの糸竹を吹つたへてよ天の川かせ

白氏詩。憶得少年^ノ長乞^ク巧^クスルコトヲ、竹竿頭^上ニ願^シ絲多^シ。

〔出典〕雪玉集、九六一番。和漢朗詠集、上、秋、七夕、二二二番。〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集註』ナシ。

〔訳〕七夕の管絃

今日という日に出会ったので、これも管絃の上達を願う五色の糸を付けて吹き伝えておくれ、天の川に吹く川風よ。

白氏文集の詩。思い出したことだ。少年のころ、七夕の夜に将来の願いごとをしたことを。竹竿の先には願い

をこめた五色の糸が、たくさん付いている。

〔考察〕「願ひの糸竹」に「願ひの糸」と「糸竹」(管絃)を掛ける。当歌は七夕の夜に、文筆や裁縫の上達を願う様子
子を詠んだもの。

〔参考〕現存する『白氏文集』に該当する漢詩は見られないが、『和漢朗詠集』では白樂天の作とする。

(廣瀬薫)

七夕枕

154あたらん契はさかし天の川絶ぬなかれに枕しつ、も

晋書。孫楚、字ハ子荆、太原中都ノ人云云。初楚少時欲ニ隱居一ト、謂ニ王濟一曰、「当ニ欲ニ枕シ石ニ漱レ流ニ、誤テ云、「漱レ石ニ枕レ流ニ」。濟曰、「流非レ可ニ枕ス、石非レ可ニ漱ス」。楚曰、「所ニ以レ枕レ流欲レ洗ニ其ノ耳一ヲ、所ニ以ハ漱レ石ニ

欲レ厲ニト其ノ齒一ヲ」。

〔出典〕雪玉集、九六六番。晋書、卷五六、列伝第二六、孫楚。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『晋書』「初楚少時―楚少時」「謂王濟曰―謂濟曰」。

〔訳〕七夕の枕

あてにならない約束は聞かない。天の川の絶えることのない流れを枕として寝ながらも。

晋書、孫楚。字は子荆、太原中都の人云々。孫楚が若い頃隱居したいと思ひ、王濟に言うことには、「石に枕し、川の流れて口をすすぐ」と言うべき所を間違つて、「石に口をすすぎ川の流れて枕する」と言つた。王濟が、「流れて枕して石で口をすすぐのではない」と言つと、孫楚は、「流れて枕するのは耳を洗いたいため、石

で口をすすぐのは歯を磨きたいからだ」と言い返した。

〔考察〕当歌は「漱石枕流」の故事を踏まえて、屁理屈をこねた孫楚のように、いい加減な約束をされても、耳を貸さないと言む。

七夕糸

(加藤森平)

155 おもふことしるし見するや七夕の手にもをとらぬさ、かにの糸

帚木卷云、立田姫といはんにもつぎなからす、たなはたの手にもをとるましく云々。

〔出典〕雪玉集、九六二番。源氏物語、帚木卷、七六頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「七夕の―織女の」。『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕七夕の糸

願っているという証拠を見せているのかなあ。織姫の織る織物にも劣らない(見事な)糸よ。

帚木の巻によると、染め物の腕前は竜田姫といっても不似合いでなく、仕立物もたなはた姫に劣らぬくらい云々。

〔考察〕『源氏物語』帚木の巻は左馬頭が亡き妻を誉めるのに、染め物上手の竜田姫と、機織り名人の七夕姫を引き合いに出した場面。奈良の西方にある竜田山は紅葉の名所で、その女神である竜田姫は秋の神、また染色の神。「さ、かにの」は「糸」に掛かる枕詞。七夕の糸については153番歌の解説、参照。

(加藤森平)

七夕即事

156 宮のうちにもる玉水も音すみて更るよおしき星合の影

朗詠集。遅々々々鐘漏初長夜、耿々々々星河欲曙天。

〔出典〕雪玉集、九七八番。和漢朗詠集、上、秋、秋夜、一三四番。

〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集注』ナシ。

〔訳〕七夕の詠歌

宮のうちに漏れる水時計の音も澄み、七夕星の光を見て、更けていく夜を惜しく思うことよ。

朗詠集。鐘の音も漏刻（水時計）も遅々として時を刻まず、秋の長い夜は始まったばかり。耿々と夜空に輝く天の川を眺めていると、ようやく空の端が明るみ始める。

〔考察〕出典は長恨歌の一節で、楊貴妃を失った玄宗の寂しさを描いたもの。秋の夜長を愁える玄宗に対して、当歌は年に一度しか会えない七夕の夜が更けるのを惜しむ。

〔参考〕歌題の「即時」は詩題の一つで、目の前の風景をそのまま詩歌に詠むこと。漢詩の「鐘漏」は、水時計で時刻を計り、鐘を鳴らして知らせること。

（呉慧敏）

七夕

157 七夕のなつともつきぬ岩枕かはすもまれのあまの羽ころも

楼炭経曰、以事ヲ論セシ劫ヲ。有二大石方四十里二百歳ニ諸天来下取ニ羅穀衣ヲ撫レ石ヲ尽サン。劫猶ヲ未レタ尽。

〔出典〕 柏玉集、六四〇番、二二四一番。雪玉集、四五二六番。万松老人従容録、卷四、第六三則。

〔異同〕 『新編国歌大観』「七夕の―七夕や」(六四〇番)。『万松老人従容録』「以事論劫―ナシ」「撫拂」「尽―窮」。

〔訳〕 七夕

織姫が天の羽衣で撫でてでも尽きない岩の枕よ、一年に一度しか枕を交わすことができないが。

桜炭経によると、例を挙げて「劫」を論じよう。一辺が四十里の大石があり、百年に一度だけ天上界の神々が地上に下り、天の衣で撫でて石は無くなっても、劫はまだ続いている。

〔考察〕 「岩枕」は石を枕にすること。『万松老人従容録』は南宋末の一三二三年に万松行秀が編集した仏教書。「従容録」の名称は、編者が住んでいた従容庵に由来する。曹洞宗の禅師であったため、その宗派で重視された。

〔参考〕 「君が世は天の羽衣まれにきて撫づとも尽きぬ巖ならなん」(拾遺和歌集、五、賀、二九九番、よみ人知らず)。

(呉慧敏)

七夕扇

158 かすとても秋のあふきの色はいさ七夕つめや心をかまし

朗詠集。尊敬。斑女カ閨中秋ノ扇ノ色。

東屋巻云、さるは、扇の色も心をきつへき閨のいにしへをは、ひとへにめてきこゆるぞ、をくれたるなめるかし。

〔出典〕 雪玉集、二二六八五番。和漢朗詠集、上、冬、雪、三〇八番。源氏物語、東屋巻、一〇一頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『和漢朗詠集』「斑―班」。『承応』『湖月抄』「ねやのいにしへをは―ねやのいにしへをばしらねば」。

〔訳〕 七夕の扇

貸すとしても、秋の扇は白色だから、さあどうだか、織姫は（借りるのを）遠慮するだろうか。

和漢朗詠集。橘在列。斑婕妤の寢室に、秋になり（無用のものとして捨てられた）扇の色。

東屋の巻によると、実は扇の色にも心を留めなければならぬ閨の故事を（知らないのだから）、ひたすらおほめするのは愚かであろうよ。

〔考察〕『和漢朗詠集』には「班女閨中秋扇色。楚王台上夜琴声」とあり、第一句は漢の成帝の愛妃班婕妤が趙飛燕に帝寵を奪われ、我が身を、夏の白い扇が秋になると捨てられるのに譬えた故事による。『源氏物語』の場面は九月で、浮舟は季節に合わない夏の「白き扇」を持ち、薫は琴を押しやり「楚王の台の上の夜の琴の声」を吟じてから、縁起でもない第一句を踏まえた表現に気づいたが、ひたすら薫の朗詠に聞き惚れるばかりで何も気づいていない浮舟を、語り手は批判している。

（劉野）

159すつといふ思ひなくてや七夕の秋のあふきも手にならすらん

斑婕妤、詩句。常_ニ恐_テ秋節_ノ至_テ涼颺_{奪_ニ炎熱_ヲ}、棄_ニ捐_{セテ}篋_{箆_ノ中_ニ恩情中_{道_ニ絶_{コトヲ}}}。

〔出典〕雪玉集、九六三番。文選、樂府上、四七三頁。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『文選』「斑―班」「涼颺―涼風」。

〔訳〕（七夕の扇）

捨てるということを考えずに、織姫は秋の扇も手に慣れ親しんでいるのだろうか。

斑婕妤の詩句。いつも心配しているのは、秋の季節が訪れ、涼風が夏の暑さを奪い去ってしまうと、（扇が）箱の中に投げ込まれるように、（君の）恩情も途中で絶えてしまうことだ。

（劉野）

叢露

160色草を尽してにほふませのうちの花には露も置まよふらむ

野分巻云、中宮のおまへに、秋の花をうへさせ給へること、つねの年よりも見所おほく、色草を尽して、よし有くろ木あか木のませをゆひませつ、おなしき花の枝さし姿、朝露の光も世のつねならず。

〔出典〕雪玉集、一〇四六番。源氏物語、野分巻、二六三頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『承応』「朝露の光もあさ夕露のひかりも」。『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 草むらの露

あらゆる種類の草花を集めて咲きにおう籬の内の花には、露もどこに置けばよいか迷っているだろう。

野分の巻によると、中宮の御庭には、秋の花をお植えになっませがていらっしやるが、それが今年は例年以上にみごとな眺めで、あらゆる種類の草花を集め、趣向に富んだ黒木や赤木の籬垣をその間々に結いわたしてあり、同じ花でも、枝ぶりといい格好といい、その上におく朝露の光までも、世間では見られない美しさである。

〔考察〕『源氏物語』は野分の巻頭で、秋が深まり、六条院の秋好中宮の庭園の美景を描写した場面。当歌は、あまり

の美しさに露も目移りがして、置き場所を決めかねて迷っていると詠む。

(大杉里奈)

原露

161跡とめておとろの道のおくまでも露分みはや春日野の原

周礼。左九棘、公卿大夫位_レ焉_二群士在_二其_レ後_一。右九棘、公侯伯子男位_レ焉_二群吏在_二其_レ後_一。

拾芥抄。唐名部曰、大中納言通用棘路。

新古今集。俊成卿、春日山おとろの道の埋れ水すまたに神のしるしあらはせ

〔出典〕雪玉集、一〇四九番。周禮注疏。拾芥抄、中。新古今集、卷第一九、神祇歌、一八九八番。

〔異同〕『新編国歌大観』『拾芥抄』ナシ。『周礼注疏』「左九棘公卿大夫―左九棘孤卿大夫」。『新古今集』「春日山―春

日野の」。

〔訳〕 原の露

春日野の跡を尋ねて、草木の乱れる道の奥までも、露が置いた草木を押し分けてみたいものだ。(藤原氏の先祖の例に倣い、公卿にまで出世したいものだ。)

周礼。左側(東)には九本の棘木が植えてある。この場所は公卿大夫の位置であり、群士(上中下士)が彼らの後方に居る。右側(西)には九本の棘木が植えてある。この場所は、公侯伯子男の位置であり、郷遂都鄙公邑の官吏が彼らの後方に居る。

拾芥抄。唐名部によると、大中納言の異称として棘路を用いる。

新古今集。俊成卿。春日野の草木に乱れる道の埋れ水のように、私は一族の公卿の中で埋れている。せめて子孫にだけでも、春日の神のご加護の験を現わしてほしい。

〔考察〕『周礼』は十三経の一つで、『儀礼』『礼記』と並ぶ三礼の一つ。『拾芥抄』は南北朝初期に洞院公賢とういんこうけんが編纂した有職故実の事典。「おどろの道」には草木が乱れ茂る道のほか、中国で「九卿きゅうけい」（九人の大臣）を「棘路」と言うことから公卿も意味する。「春日野」には藤原氏の氏神を祭る春日神社があり、藤原氏を示す。ちなみに三条西実隆は内大臣にまで昇進した。

愛萩

（大杉里奈）

162 もろくちる露をかなしむ心をも花にわする、萩のした風

古今の序の詞、まへにしるし侍る。

〔出典〕雪玉集、一〇〇二番。古今集、仮名序、一八頁。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 萩を愛でる

萩の下を吹く風で、はかなく散る露を悲しく愛おしく思う気持も、萩の花を見ると自然に忘れられるなあ。

古今集序の文章、前述しています。（113番歌、参照）

〔考察〕当歌は『古今集』仮名序の一節「花をめて（中略）露をかなしむ」を踏まえる。

（平石岳）

翫秋花

163うへたてし其世はさそと秋の花野の宮人の跡もなつかし

野宮歌合。順判云、おまへの庭の面に、薄、萩、らに、しをに、草のかう、をみなへし、菫萱、なてしこ、小萩など、うへさせたまふ。松むし、す、虫を、はなたせたまふ。人くくに、やかて其物につけて、歌を奉らせたまふ。

〔出典〕雪玉集、一〇三六番。野宮歌合。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。正保四年（一六四七）版『歌仙家集』所収『源順集』巻一〇「順判云ーナシ」。

〔訳〕 秋の花を愛でる

秋の花を植えつけた当時は、さぞや（美しかっただろう）と、野宮に住んでいた宮人の痕跡もなつかしく思われるなあ。

野宮歌合において、判者源順が云うには、（規子内親王は）お住まいの庭に、薄、萩、蘭、紫苑、芸、女郎花、菫萱、撫子、小萩などを植えさせなされた。松虫、鈴虫を放たせなされた。（その庭に集まった男女）各人に、さっそくその庭にある草花や昆虫について、歌を献上させなされた。

〔考察〕野宮歌合は、規子内親王が天禄三年（九七二）に催した前栽歌合。「女四宮歌合」「斎宮歌合」「規子内親王前栽歌合」とも称され、源順が判者を務めた。当歌はその歌合に思いを馳せたもの。「野の宮人」に「野の宮」と「宮人」を掛ける。

〔参考〕『三玉挑事抄』巻末の「引用書目」には「野宮歌合」と記されている。「順判云」とあるが、「おまへの庭の」以下の文章は、源順門下の源為憲によるもの。なお247番歌の注釈本文に、「順家集云、貞元元年（九七六）の九月、

斎宮、野宮に前栽うへて、またよむ。」とある。

秋蘭已含露

（平石岳）

164 藤はかまほころひてこそ紫の色にくたくる露も見えけれ

朗詠集。菅三品。蘭、惠苑ノ嵐ハ摧レ紫ヲ後。

〔出典〕雪玉集、三〇八三番。和漢朗詠集、上、秋、菊、二七一番。〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集註』ナシ。
〔訳〕 秋の蘭は已に露を含む

藤色の袴の縫い目がほどけると、衣の紫色の露の部分が見えるが、藤袴（蘭）の花が咲いて嵐でうちくだかれると、紫色に染まった露が見えるなあ。

和漢朗詠集。菅原文時。蘭や恵が植えられている香草園に、秋の嵐が吹き荒れ、紫の花々がうちくだかれてしまった後に。

〔考察〕当歌は「藤はかま」に藤色の袴と藤袴（蘭）、「ほころひ」にきものの縫い目がほどけることと花のつぼみが開くこと、「露」に衣装の露（袖くくりの紐の垂れ下がった部分）と水の露を、それぞれ掛ける。

（平石岳）

蘭薫風

165 秋のかせ匂ひはくれ藤はかましけきを破る名にはたつとも

本朝文粹。前中書王、菟裘賦。叢蘭豈ニ不レヤ芳乎、秋風吹テ而先ッ敗ル云云。

〔出典〕雪玉集、二二六八番。本朝文粹（新訂増補国史大系）、巻第一。和漢朗詠集、上、秋、蘭、二八七番。

〔異同〕『新編国歌大観』『本朝文粹』『和漢朗詠集』ナシ。

〔訳〕 蘭の薫風

秋風よ、蘭の花の香りは運んでおくれ。群生する蘭を打ち砕くという評判は立っても。

本朝文粹。兼明親王、菟裘賦。群生する蘭は、どうして香わしくないことがあるか。しかし、秋風が吹くと、真っ先にうちくだかれて（香りを失って）しまうものなのだ云々。

〔参考〕『国史大系』の底本は寛永六年（一六二九）版。兼明親王は醍醐天皇の皇子で、詩文に優れた。賜姓源氏で、左大臣に出世したが、藤原兼通らによって皇族に戻され、政權から遠ざけられた。本作品はその時の思いを述べたもの。「菟裘」は魯の国で、隠公が隠棲したとされる地名。

（廣瀬薫）

槿一日栄

166 柏霜の、ちはるかにいはん松の色もおもへはけふの露の朝かほ

朗詠集。松樹千年終_ニ是_レ朽_ス、槿花一日自_ラ為_レ栄_ヲ。

又、順詩。十八公ノ栄_ハ霜_ノ後_ニ露_ハレ、一千年ノ色_ハ雪_ノ中_ニ深_シ。

〔出典〕柏玉集、七〇二番。和漢朗詠集、上、秋、槿、二九一番。和漢朗詠集、下、松、四二五番。

〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集註』ナシ。

〔訳〕 朝顔の一日の栄え

『三玉挑事抄』注釈 秋部（上）

霜が降りた後、遙か千年の緑を表わす松の色も、考えてみれば今日、露が置いた朝顔（と同じ）だなあ。

和漢朗詠集。松は千年の長寿だが、ついには枯れ果てる時が来る。（それに対して）槿の花は一日の命だが、花開いて、自ら満足し楽しんでる。

また、源順の詩。いかなる環境にもめげない松の貞節の誉れは、霜の後に初めて誰の目にも明らかに見え、その千年の緑は雪の中でいつそう濃く見える。

〔考察〕順詩の「十八公」は「松」の字を分解したもの。当歌は寿命が千年でも一年でも、自らの分に安んじた生き方であれば同じことだと詠む。

女郎花

（廣瀬薫）

167なにしおは、おらてそあるへき女郎花いはすは人の色をかへよと

論語、学而篇。賢トシテ賢ヲ易レ色ヲ。

〔出典〕雪玉集、三六九三番。論語、学而第一、二四頁。〔異同〕『新編国歌大観』『論語』ナシ。

〔訳〕
女郎花おみえし

（『論語』に）「賢者には顔色を変易しなさい」と言っていないなければ、女を意味する女郎花を折らないでいられようか。

論語、学而篇。賢者を尊み、（賢者に対しては）顔色を改めて礼遇しなさい。

〔考察〕『論語』の「易色」には様々な解釈があるが、テキストの訓「色を易かふ」に従って訳した。ちなみに「色に易か

ふ」と読むと、賢者を重んじる心を、女色を好む心と取り替える、と訳せる。

〔参考〕「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人に語るな」（古今集、巻四、秋上、二二六番、題知らず、僧正遍照）。

（廣瀬薫）

夕薄

168 ^柏まねきてや入日をかへす袖ならし尾花に遠き夕くれの色

淮南子、出于春部。

〔出典〕柏玉集、六九〇番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 夕暮れの薄

（夕日を）招いて沈む日を戻す袖だろうか。（袖に見える）薄の穂の遙か遠くに夕暮れの色（が見える）。

淮南子。春の部に出る。（85番歌、参照）

〔考察〕85番歌に引く『淮南子』は、暮れてゆく日を戈で招きよせた話。当歌は風に揺れる薄の穂が、まるで夕日を招いて戻す袖に見えた、と詠む。薄の穂が袖に見えるという発想は、「秋の野の草の袂か花すすき穂にいでて招く袖と見ゆらむ」（古今集、巻四、秋上、二四三番、在原棟梁）等に見える。

（加藤森平）

古砌薄

169 花す、さうへしやいつのなき玉をまねく袖とものころのへかな

『三玉挑事抄』注釈 秋部（上）

楚辞註曰、招魂ハ者宋玉之所レ作也。古ハ者人死スル時ハ、則使レ人ヲ以ニ其ノ上服一升屋履危ヲ北面シテ号ツテ曰「臯某復シ、遂ニ以ニ其ノ衣一招レ之ヲ乃下テ以テ覆レ尸ヲ云云。

〔出典〕雪玉集、二八八四番。古今事文類聚、後集、卷二〇、魂魄、招魂。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『和刻古今事文類聚 後集』「楚辞註曰―朱氏曰」「則使人以其上服―則以其上服」「北面―北面而」。

〔訳〕古ノ頃ノ薄イヒトシ

花薄を植えたのはいつのことだろうか。死者の魂を招く袖かのように（薄が）残っている野原だなあ。

楚辞の注によると、「招魂」は宋玉の作品である。昔、人が死んだ時は、その人の服を持って建物に上らせ、屋根の棟木を踏み、北に向かつて、「ああ、誰それ返れ」と叫び、それからその衣で魂を三度招き、屋根から下りて（その衣で）屍を覆う云々。

〔考察〕出典の本文は『楚辞』に収められた宋玉作「招魂」に関する注釈。招魂は死者の魂を招き申うこと。衣で魂を招くことから、当歌は薄を袖に見立てて詠む。

〔参考〕楚辞註とあるが『楚辞章句』『楚辞補註』『楚辞集註』『楚辞集註』には同文が見られない。

（加藤森平）

薄似袖

170 涼しさをまねく玉をもつ、みもつ袖や尾花か露の秋かせ

王子年、拾遺記第四曰、昔黄帝時、露成子遊寒山之嶺、得黑蚌在高崖之上。故知黑蚌能飛矣。至燕昭王時、有

国献於昭王、王取瑤漳之水、洗其沙泥。乃嗟嘆曰、「自懸日月以来、見黑蚌生珠、已八九十、遇此蚌千歳一生珠也」。珠漸輕、昭王常懷此珠、当隆暑之月、體自輕涼、号曰銷暑招涼之珠也。

〔出典〕雪玉集、七六五五番。拾遺記、卷四（『和刻本漢籍隨筆集』第十集）。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『拾遺記』「露成子—霧成子」「珠漸輕—珠漸細」。

〔訳〕薄が袖に似る

涼しさを招くという真珠をも包み持つ袖だろうか。（袖のように見える）薄の穂の露に秋風が吹いている。

王子年の拾遺記第四卷によると、昔黄帝の時代に露成子が寒山の嶺に行き、カラス貝が高い崖の上にあるのを見つけた。それゆえカラス貝が飛べることを知った。燕の昭王の時代になり、ある国が昭王に献じた。王は瑤を漳河の水につけ、その泥を洗った。そして感嘆して、「長年かけてカラス貝の珠を八、九十は見たが、これは千年に一度の珠である」と言った。珠は軽く、昭王は常にこの珠を懐に入れて暑いときに体を涼めて、「銷暑招涼の珠」と名付けた。

〔考察〕当歌の「涼しさをまねく玉」は、昭王が懐に入れて涼をとったカラス貝の真珠のこと。玉を包む袖から薄を連想して、薄の穂に置く露を真珠に見立てている。

（加藤森平）

秋草

雪玉十卷百首歌中、於南京春日被詠之云々
171此ころの都の秋よあはれいかにあはまく野へのおほく成行

万葉集、卷三。報佐伯宿祢赤麻呂歌一首、娘子。千磐破神ノ之社四無有世伐春日之野辺尔粟種益乎。

王風、黍離ノ詩曰、彼黍離々^{タリ}、彼稷^リ苗^{アリ}云云。註曰、周既東遷^{シテ}、大夫行^レ役^ニ、至^ニ于宗周^一。過^レ故^ノ宗廟宮室^一、尺為^ニ禾黍^一。閔周室之顛覆^{トシテ}、傍徨^{トシテ}不忍^レ去^ニ。故賦^ニ其所^レ見、黍之離々^{タルト}、与^ニ稷之苗^一云云。此歌、もし黍離詩のふる事にて侍らは「此頃の都の秋」は南都の事に侍るへし。

〔出典〕雪玉集、四二二四番。万葉集、卷三、四〇四番。詩経、王風、黍離、一八二頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『秋草ノ草』。『万葉集』『報佐伯宿祢赤麻呂歌一首娘子報佐伯宿祢赤麻呂贈歌一首』。『詩経集註』『彼稷苗―彼稷之苗』。

〔訳〕 秋の草

近ごろの都の秋よ、ああ、どれほど粟をまく野原が多くなっていくことよ。

万葉集、卷三。娘子が佐伯宿祢赤麻呂の歌に答えた一首。神の社さえなければ、春日の野原に粟を蒔くのに。詩経の王風、黍離の詩によると、あそこのキビは垂れ下がり、あそこのコキビは苗を出す云々。註によると、周は既に洛邑に都を遷していて、大夫が役目のために西周に行き、かつての都が置かれていた地に至った。西周の宗廟や宮殿を過ぎると、そこには悉く粟やキビが生い茂っていた。西周が倒されさ迷ったことが思われて、その場を去ることが出来ない。よってこの賦はその所を見て、「あそこのキビは垂れ下がり、あそこのコキビは苗を出す」と詠んだと云々。この歌がもし、黍離詩の故事を踏まえていますならば、(当歌の)「この頃の都の秋」の「都」は南都(奈良)のことでしょう。

〔考察〕『万葉集』の「神の社」は相手の妻を暗示し、「粟蒔く」に「逢はまく」を掛ける。『詩経』に注された周は初め洛陽(西都)を都と定めたが、後に洛邑(東都)に遷都した。これを「周の東遷」と言い、それ以前を西周、そ

れ以後を東周と呼ぶ。黍離の詩は、西周の宗廟や宮室が荒れ果て、キビが生い茂っている風景を見た嘆きを詠んだもの。当歌はそれを踏まえて、旧都の秋に思いを寄せたもの。

〔参考〕『詩経集註』は朱熹の『集伝』を基に、江戸前期の儒学者である松永昌易が評註を付けたもの。寛政三年（一七九一）版（寛文四年（一六六四）の再刻、早稲田大学古典籍総合データベース）を使用。

（風岡むつみ）

虫

172 いとはすやわひはつる身を秋の虫のさせるふしなくのこる命は

後拾遺集序。其ほかの歌、秋の虫のさせるふしなく云々。

〔出典〕雪玉集、七四〇六番。後拾遺集。〔異同〕『新編国歌大観』『後拾遺集』ナシ。

〔訳〕 虫

いやに思わないのだろうか、悩みつくした身を。秋の虫の「させ」（さりぎりす）ではないが、「させる」（たいた）こともなく生き残っている命は。

後拾遺集序。（三代集に採られなかった）そのほかの歌は、秋の虫の「させ」（さりぎりす）ではないが、「させる」（たいた）見どころもなく云々。

〔考察〕「さりぎりす」は「つづりさせ」（綴り刺せ）と鳴くことから、「させ」は「さりぎりす」の異名。「させる」（たいた、という意味）に「させ」を掛ける。当歌は、悩み苦しみ生きる気もしないのに、生き長らえているのは、命がわが身をいやに思っていないのだろうか、と詠む。

〔参考〕「秋風に^{ほら}綻びぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりす鳴く」（古今集、卷一九、雑躰、一〇二〇、在原棟梁）。

（劉野）

早蛩鳴復歇

173 ほのかなる初秋かせのきりくすまたゆか遠き声もめつらし

詩、七月篇。七月在^レ野^ニ、八月在^レ宇^ニ、九月在^レ戸^ニ、十月蟋蟀入^ニ我^カ牀^ノ下^ニ。

〔出典〕雪玉集、一〇七五番。詩経（中）、国風、豳風、一一九頁。〔異同〕『新編国歌大観』『詩経』ナシ。

〔訳〕 早くも^{きりぎりす}蛩が鳴き、また止む

かすかに初秋の風の中で蟋蟀の鳴き声が、まだ寢床から遠く聞こえるのも珍しい。

詩経、七月篇。七月は野にいて、八月は軒下において、九月は家の戸口において、十月になると蟋蟀は、私の寢床の下に入りこむ。

（劉野）

虫怨

174 露霜に恨る虫よくる、まをまたぬたくひもあれは有世に

毛詩。曹風、蜉蝣詩註云、蜉蝣^ハ渠^ハ略也。朝^ニ生^{シテ}暮^ニ死^ス云云。

〔出典〕雪玉集、六八一一番。詩経、曹風、蜉蝣。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『十三経注疏』「暮死一夕死」。

〔訳〕 虫の恨み

露や霜を恨めしく思う虫よ、日が暮れるのを待たずに死ぬ蜉蝣のようなたくいも住めば住める世の中なのだから

(恨めしく思うなよ)。

毛詩。曹風、蜉蝣詩註によると、蜉蝣は渠略(カゲロウ)であり、朝生まれて夕死ぬ云々。

〔考察〕「露霜」は秋の末に露が凍って霜のようになったもの、という意味もある。この場合「露霜」は、虫たちの命の終わりを告げる冬の到来を示す。当歌は虫よりも短命な蜉蝣かひろうを引き合いに出して、虫たちを慰めて詠んだもの。蜉蝣は成虫の寿命が数時間から数日と短いため、はかないものに譬えられる。

〔参考〕「かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。」(『徒然草』第七段)。

床間虫

(呉慧敏)

175 なげやわかゆかをゆつらん蛩身は露のまの夢もたのみす

詩経、見右。

蛩巻云、ゆかをはゆつりきこえたまふて、御木丁ひき隔ておほとのこもる云々。

〔出典〕雪玉集、一〇六六番。源氏物語、蛩巻、二〇九頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『湖月抄』『承応』「隔て―隔て、」。

〔訳〕 寝床にいる虫

鳴きなさい。私の寝床を譲ろう。蟋蟀はほんの短い間の夢もあてにでき(ず生きていられ)ないのだから。

詩経は前掲。(173・174番歌、参照)

蛩巻によると、(花散里は光源氏に)御帳台をお譲りなさって、御几帳を間に隔ててお休みになる云々。

〔考察〕『源氏物語』は、光源氏との共寝など自分には不似合いだとあきらめた花散里が、自分の寝所を源氏に譲る場面。当歌は短命な虫を愛しく思い、自分の寝床を譲って思う存分に鳴かせたい気持ちを詠む。

（呉慧敏）

秋夕雲

176 柏我のみや心をつけて心なき雲もかなしき秋のゆふくれ

帰去来辞、見于春部。

〔出典〕柏玉集、七八五番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 秋の夕雲

私だけが関心を寄せて、無心である（はずの）雲までも悲しく見える秋の夕暮れであろうか。

帰去来辞。春の部に掲出。（48番歌、参照）

〔考察〕当歌は「雲は無心に峰からわき起こる」（『帰去来辞』）を踏まえて、無心の雲を見ても悲しいと詠む。

（大杉里奈）

秋夕傷心

177 同蝉の声にきけは鳴よる蛩人におもひの夕をもしれ

〔出典〕三玉和歌集類題、秋夕傷心。〔異同〕『三玉和歌集類題』「さけは―汝も^{きけは}」。

〔訳〕 秋夕の傷心

蝉の声を聞くと近寄り（互いに）鳴きあう蟋蟀よ、人に物思いをさせる秋の夕暮れも知ってほしい。

〔考察〕注釈は178番歌と同じで、夏の蝉と秋の蟋蟀が短命を恨んで鳴きあう、秋の夕暮れを詠んだ『白氏文集』。当歌はそれを踏まえつつも、秋の夕べは虫だけでなく人にも物思いをさせることを知ってほしい、と虫に呼びかける。

(大杉里奈)

虫声怨

178^同せみのこゑくるしきよりも蛩秋のおもひの我やまされる

白氏文集註_三于夏部蝉ノ歌_二。

〔出典〕柏玉集、七三〇番。「異同」『新編国歌大観』「虫声怨—虫声怨蝉」「くるしきよりも—くるしきよりは」。

〔訳〕 虫の声、恨めし

蝉の泣き声が苦しそうに聞こえるが、蟋蟀よ、秋の思いは私の方が増さっているだろうか。

白氏文集、夏部の蝉の歌に注す。(114・115番歌参照)。

〔考察〕115番歌注釈の『白氏文集』では、蝉と蟋蟀の鳴き声が悲しく聞こえたとするのに対して、当歌は虫よりも自分の方が秋のもの思いにふけると詠む。

(大杉里奈)

故郷秋夕

179夕露の光や玉をのこすらん簾絶たるやとの秋かせ

白氏文集。題_二于家公主ノ旧宅_二詩_二。台傾_テ滑石猶_テ残_レ砌_ニ、簾断_テ真珠不_レ満_レ鈎_ニ。

〔出典〕雪玉集、七八一七番。白氏文集、卷三一、同諸客題于家公主旧宅。和漢朗詠集、下、故宫付破宅、五三二番。

〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集』ナシ。『白氏文集』『真珠―珍珠』『鈎―鈎』。

〔訳〕 旧宅の秋の夕べ

夕陽の光を受けて照り映える露は、真珠の面影を残しているようだ。簾も無くなった屋敷に秋風が吹いているなあ。

白氏文集。于家公主の旧宅に題した詩。屋敷の楼台は傾いて、よく磨かれた礎石は今なお石畳のあたりに残っている。真珠の飾りを施した簾もちぎれて、鈎（簾を巻く留め金）に掛からない。

〔考察〕『白氏文集』は、唐代の憲宗の娘であった于家公主の荒廢した旧宅を、白居易が訪れ、その屋敷を題にして作った七言律詩の頌聯。当歌はこれを踏まえ、夕陽に輝く露を真珠に見立てる。歌題の「故郷（ふるさと）」は旧宅の意味。

（平石岳）

野分

180 ^{碧瑩} はかなしや岩ほもいか、と斗の野分におもふ花の千くさは

野分巻云、野分、例の年よりもおとろくしく、空の色かはりて吹いつ。花とものしほるゝを、いとさしも思ひしまぬ人たに、あなわりなどおもひさはかるゝを、まして、草むらの露の玉のを、みたるゝまゝに、御心まどひもしぬへくおほしたり。又云、かせこそ、けに岩ほも吹あけつへき物なりけれ云々。

〔出典〕三玉和歌集類題、秋、野分。源氏物語、野分巻、二六四頁、二六六頁。

〔異同〕『三玉和歌集類題』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 野分

巖いわおもどうなるのか（吹き飛ばされてしまうか）というぐらいの（激しい）野分で、種々の草花ははかなく散るなあと思われることだ。

野分の巻によると、野分が例年よりもはげしく、空模様も変わって吹き始めた。（秋好中宮がお庭に植えさせた）花々が風でしおれるのを、それほど（秋の草花に）執着のない者でさえ、ああ大変だと思つて騒ぐのだから、なおさらのこと、（中宮は）草むらの露の玉が乱れ散るのをご覧になると、ただ心を痛めておいでになる。また、同じ巻によると、野分の強風は、なるほど巖をも吹き上げてしまうものだったなあ（と夕霧は思う）云々。

〔考察〕『源氏物語』野分の巻は、秋好中宮のいる六条院に例年になく激しい野分（台風）が襲い、秋の景物の見事さで人々の目を奪っていた中宮のお庭を、中宮をはじめ各人が心配する場面。「又云」以下は、野分により御簾が吹き上げられ、人目に触れないように厳重に警戒されていた紫の上の姿を、夕霧が垣間見て、その警戒の厳重さを巖に例えた箇所。

（平石岳）

181 雲まよひ村雨すこく吹なしてさもさはかしき秋かせのこゑ

野分巻。夕霧歌。風さはきむら雲まよふ夕にもわする、まなくわすられぬ君

〔出典〕雪玉集、一四〇三番。源氏物語、野分巻、二八三頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕（野分）

雲が(強風に)迷い(乱れ動き)、にわか雨が恐ろしい音で吹き荒れていて、まったく穏やかでない秋風の音だなあ。

野分の巻。夕霧の歌。風が吹き荒れ、むら雲がその風に迷う夕べでも、片時もなく忘れられないあなたであるなあ。

〔考察〕『源氏物語』は、夕霧が幼なじみで恋人の雲居雁へ送った和歌。

(平石岳)

故郷野分

182ふりのこるひわたかはらも庭もせに木のはと散て野分吹空

おなし巻云、おと、の瓦さへ、のこるましようふきちらすに云々。又云、見わたせは、山の木とも、吹なひかして、枝ともおほくおれふしたり。草むらは更にもいはす、ひわた、かはら、所くゝのたてしとみ、すいかいなとやうの物、みたりかはし。

〔出典〕雪玉集、三〇〇番。源氏物語、野分巻、二六八頁、二七〇頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「ひわたかはらも―ひばらがはらも」。『湖月抄』『承応』ナシ。

〔訳〕 故郷の野分

古くなって(屋根に)残っていた檜皮や瓦も、庭も狭く思うほど、木の葉のように(庭に)散り、野分が吹きすさぶ空であるなあ。

前の和歌と同じ巻によると、御殿の瓦までが一枚残らず吹き飛んでしまっそうで云々。また同じ巻によると、

庭を見渡すと、(風は)庭の築山の木々をも吹き倒して、枝が多く倒れ伏している。草むらの荒れようは言うまでもなく、屋根の檜皮、瓦、あちこちの立部、透垣などのような物が雑然と散らばっている。

〔考察〕『源氏物語』は、野分の風のすさまじさと、それにより無残になった六条院の様子を描いた箇所。異文の「ひばらがはら」の「ひばら」は、檜が生い茂っている原という意味。

秋
須磨浦

(廣瀬薫)

183^柏すまの浦や木の間もりこぬ月も猶こゝろつくしの秋の波風

須磨の巻云、すまには、いと、心つくしの秋風に、海はすこし遠けれど云々。

〔出典〕 柏玉集、九〇三番。源氏物語、須磨巻、一九八頁。

〔異同〕 『新編国歌大観』「須磨浦―浦月」。『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 秋、須磨の浦

須磨の浦では(木々が生い茂って)木の間から月の光は漏れてこないが、やはり物思いをさせる秋の波風(は吹いてくるの)だなあ。

須磨の巻によると、須磨では、ひとしお物を思わせる秋風が吹き、海からは少し離れているが云々。

〔考察〕 須磨は光源氏の流謫した地。当歌は「木の間こよりもりくる月の影見れば心まづくしの秋は来にけり」(古今集、秋上、一八四番、題知らず、よみ人知らず)も踏まえる。

(廣瀬薫)

月

184秋の月中に有てふ葉もか老をかへして幾千世もみん

錦繡萬花谷曰、后羿、得_二不死ノ葉_ヲ於西王母_ニ。其妻嫦娥、竊_レテ之_ヲ奔_レ月_ニ、遂_ニ託_ス身_ヲ於月中_ノ仙_ニ云云。

〔出典〕雪玉集、一一五九番。錦繡萬花谷(明刻本)、前集卷一、月。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『錦繡萬花谷』「后羿―嫦娥羿」「不死葉―不死之葉」「託―托」「身於月中仙―身月中仙」。

〔訳〕 月

秋の月の中にあるという不死の葉が欲しいものだ。(その葉を飲み) 若返つて幾千年も見てみよう。

錦繡萬花谷によると、后羿が不死の葉を西王母から貰い受けた。その妻の嫦娥がこの葉を盗んで月に逃げ、ついにその身は月にいる仙人になった云々。

〔考察〕 出典は「嫦娥奔月」の逸話。后羿は弓の達人で、夏王朝を篡奪した有窮国の君主。

〔参考〕『錦繡萬花谷』は南宋時代の類書。『円機活法』『淮南子』にも類話があるが、本文は異なる。

(廣瀬薫)

十五夜翫月

185底に住魚の数さへあらはるゝ、水に棹さす月そえならぬ

朗詠集。岸白_{シテ}還_テ迷松_ノ上_ノ鶴、潭融_{ツテ}可_レ竿_ヘ藻中_ノ魚。

〔出典〕雪玉集、一一七六番、一三七四番。和漢朗詠集、上、秋、十五夜_付月、二四七番。

〔異同〕『新編国歌大観』「水に棹さす―水に舟さす」(一一七六番、一三七四番)。『和漢朗詠集注』「潭融可竿―潭融可筭」。

〔訳〕 十五夜に月を賞翫する

水底に住んでゐる魚の数まで明らかにしてしまふぐらいに、棹を差す水面に差す月の光がなんとも言えないほどすばらしいなあ。

和漢朗詠集。月光に照らされて岸边は所々白く見えるが、それは松の上にいる鶴なのかなと、何回も見間違えるほどである。池の水底まで月光がさしこんでよく見えるので、藻の中に潜む魚をいちいち数えることができるほどだ。

〔考察〕「棹さす月」に「棹刺す」(棹で水底を突いて舟を進める)と「射す月」(水面に射す月)を掛ける。

〔参考〕御物粘葉本『和漢朗詠集』には「潭融可算」とあるが、「算」「竿」「筭」いずれも「かぞふ」と訓じる。

(加藤森平)

山月

186 そめいろの山の南の秋つしま秋を時とや月もすむらん

円機活法。月部曰、釈氏書言、須弥山ノ南面ニ有閻浮樹一月過レ樹ヲ影入ニ月中ニ云云。

法苑珠林曰、南閻浮提壽不定。西瞿耶尼壽二百五十歳。東弗波提壽百歳。北鬱单越壽千歳。須弥之四方有也云云。

〔出典〕雪玉集、一一二八番。円機活法、卷一、天文門、閻浮樹影。〔異同〕『新編国歌大観』『円機活法』ナシ。

〔訳〕 山の月

須弥山の南にある日本では、秋を（一番良い）時期として月も澄むのだろうか。

円機活法。月の部によると、釈氏書言には、須弥山の南側に閻浮樹があり、月が木の上を過ぎると樹影が月に映る云々。

法苑珠林によると、南閻浮提は歳が定かでない。西瞿耶尼は二百五十歳。東弗波提は五百歳。北鬱単越は千歳。須弥山の四方に有る云々。

〔考察〕「そめいろ（蘇迷蘆）」は須弥山、「秋つしま（秋津島）」は日本。南閻浮提・西瞿耶尼・東弗波提・北鬱単越は、須弥山の南・西・東・北にある大陸。南閻浮提には閻浮樹と呼ばれる大樹がある。

〔参考〕『円機活法』の一文は、『西陽雜俎』にも見られる。『法苑珠林』は唐の道世撰で、六六八年成立、百二十巻、仏教の故実を集めたもの。現存本には「南閻浮提」以下の本文は見当たらない。天台教学の入門書としてよく読まれた『天台四教儀』（『大正新脩大藏経』第四十六冊 No.1931）に、「謂東弗波提（壽二百五十歳）南閻浮提（壽一百歳）西瞿耶尼（壽五百歳）北鬱單越（壽一千歳命無中天。聖人不出其中。即八難之一）皆苦樂相間。」とあるが、数字が一致しない。『仏説立世阿毘曇論』壽量品第二十二（『大正新脩大藏経』第三十二冊 No.1644）には、「剡浮提人或十歳。或阿僧祇歳。是中間壽命漸長漸短。長極八萬歳短極十歳。西瞿耶尼人二百五十年是其壽命。東弗波提人壽五百歳。北鬱單越定壽千年。人中五十歳是四天王一日一夜。」とあり、数字は合う。

（加藤森平）

187 わするなよ三笠の山をさしてこそしらぬ海辺の月もみつらん

古今集云、もろこしにて、月をみてよめる。

あまの原ふりさけみれはかすかなる三笠の山に出し月かも

此歌は、むかし、仲まろを、もろこしに物ならはしにつかはしたりけるに、あまたの年をへて、えかへりまうてこさりけるを、此国より、又、使まかり至りけるに、たくひてまうて来なんとて、出たりけるに、めいしうといふ所の海辺にて、かの国の人、馬のはなむけしけり。よるになりて、月の面白くさし出たりけるを見てよめるとなん、かたり伝ふる云々。

〔出典〕雪玉集、五三三番、六五一六番。古今集、卷九、羈旅、四〇六番。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『古今集』「月の面白くさし出たり一月のいとおもしろくいてたり」。

〔訳〕（山の月）

忘れないでほしい。三笠山を目指して（船出するために来たから）、（明州という）知らない海辺で月も見たのだからということ。

古今集によると、唐の国で月を眺めて詠んだ歌。

広々とした大空をはるかに見晴らすと、今しも月が上ったところである。思えば昔、まだ若かった私が唐土に出发する前に、春日の三笠の山の端から上ったのも、今夜の月と同じようなものであった。

この歌は、「かつて歌の作者仲麿を政府から留學生として唐土に派遣したところ、長年を経ても彼は帰朝できなかつたが、わが国からさらに使節が派遣されて到着したので、一緒に帰ってこようとして出発したところ、明州という所の海岸で、その国の人々が送別会を開いてくれた。その時、夜になって月がきれいにさし上つたのを眺めて彼が詠んだ歌である」と語り伝えられている云々。

〔考察〕「三笠の山をさして」の「さし」は「笠」の縁語。

岡月

(劉野)

188月よいかた、あたらのと斗に誰にしられん岡のへの松

あかしの巻に云、かの岡への家も、松のひ、き、波の音にあひて云々。又云、十三日の月の、花やかにさし出たるに、只「あたらの」と聞へたり。

〔出典〕雪玉集、一二三三番。源氏物語、明石巻、一四〇頁、一六七頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『湖月抄』『承応』ナシ。

〔訳〕 岡の月

月はどうであろうか(美しく輝いているだろうか)。ただ「せっかくの夜を」とそれだけで、(光源氏以外の)誰に知られようか。岡辺に住み、その松のように源氏の訪れを待つ明石の君は。

明石の巻によると、あの(明石の君が住んでいる)岡辺の家でも、(源氏の弾く琴の音が)松風の響きや波の音と一緒に云々。また同じ巻によると、十三日の月がはなやかに差し出ている頃合いに、ただ「あたらの夜の」と申し上げた。

〔考察〕「あたらの夜の」は、「あたらの夜の月と花とを同じくはあはれ知らむ人に見せばや」(後撰、春下、一〇三、源信明。月のおもしろかりけるに夜、花を見て)の初句で、入道が娘を源氏に会わせたい意をほのめかす。「岡のへの松」の「松」に「待つ」をかける。

浦月

(呉慧敏)

189 わかよはひふけるの浦の秋の月わすれねよるの鶴の思ひも

白氏文集、新樂府。第三第四、絃ハ冷々トシテ、夜ノ鶴憶テ子ヲ籠リ中ニ鳴。

〔出典〕雪玉集、一二六八番。白氏文集、卷三、新樂府、五絃彈。〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕 浦の月

わたしは年をとり、吹飯の浦で秋の月を見ていると、夜の鶴が子を思うようなわが子への思いも忘れてしまえ。

白氏文集、新樂府。第三・第四の絃は清々すがすがしくて、夜の鶴が子を思つて籠の中で鳴くようだ。

〔考察〕当歌は年をとつたから、わが子を思う情愛の念を捨てて極樂往生を願うもの。

〔参考〕「吹飯ふけひの浦」は和泉の国の歌枕で、「更け」を掛ける。「天つ風吹飯の浦にゐる鶴のなか雲井に帰らざるべき」(新古今集、雑下、一七二二、藤原清正。殿上離ればべりて詠みはべりける)以来、鶴の名所。「夜の鶴」は親子の愛情の深さをたとえていう。

(呉慧敏)

190 いくよわれつなかぬ舟のうき枕あかしの月のゆくにまかせて

文選。賈誼、鵬鳥賦曰、泛乎若二不レ繫之舟一。

〔出典〕雪玉集、四五四七番。文選、賦編、下卷、一〇六頁。〔異同〕『新編国歌大観』『文選』ナシ。

〔訳〕 (浦の月)

幾夜もわたしは、つながれずに漂う舟の中で夜を明かし、明月の行くにまかせて（旅をすることだ）。

文選。賈誼の鵬鳥賦によると、つながれない舟のように自由に漂う。

〔考察〕 賈誼（前二〇〇〜前一六九）は前漢の文帝に仕え、博士となる。「泛」は浮かび漂う、「浮き枕」は船中の旅寝という意味。「あかし」は夜を「明かし」（動詞）と、明るいを意味する「明かし」（形容詞）を掛ける。当歌は月の行くまま、自由に漂いながら舟の上で旅寝することを詠む。

（大杉里奈）

橋月

191うちわたす音さやか成板はしの霜に跡なき秋のよの月

温庭筠、詩句。人跡板橋霜。

〔出典〕 雪玉集、一二四二番。温飛卿詩集（和刻本）。〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。『温飛卿詩集』「跡」迹。

〔訳〕 橋の月

かけ渡す音が高く澄んで聞こえる板橋に霜がおり、（人が来た）跡が残っていない（さまを照らす）秋の夜の月だなあ。

温庭筠の詩句。板橋に霜がおり、人の足跡が残っている。

〔考察〕 温庭筠は晩唐の詩人。異同には天保四年（一八三三）版を使用。

（大杉里奈）

192あたらしき橋うちわたす西ひかしひとつ色なる水の月影

東坡全集、二十三。両橋詩并引。

惠州之東、江谿合流、有橋、多廢壞、以小舟渡。羅浮道士鄧守安、始作浮橋、以四十舟為二十舫、鉄銷石碇、隨水漲落、榜曰東新橋。州西豐湖上、有長橋、屢作屢壞、栖禪院僧希固、築進兩岸、為飛閣九間、尽用石塩木、堅若鉄石、榜曰西新橋。皆以紹聖三年六月畢工、作云云。

〔出典〕雪玉集、五二七六番。東坡全集、卷二三、両橋詩并引。〔異同〕『新編国歌大観』『東坡全集』ナシ。

〔訳〕（橋の月）

新しい橋を東と西に渡して、（どの橋から見ても）同じ色の河水に月が映っているなあ。

東坡全集、卷二十三卷。両橋の詩、並びに序。

惠州の東は、大河や谷川が合流しており、橋があっても多くは壊されるので、小舟で人を渡していた。そこで、羅浮の道士である鄧守安という者が始めて浮橋をつくり、四十葉の舟を二十の舫もやい舟として、鉄の鎖と石の礎石を備えて、河水の増減に従わせるようにし、表札を立てて「東新橋」と呼んだ。それから、惠州の西にある豊湖の上にも長い橋があり、たびたび作っては、たびたび壊れた。そこで、栖禪院の僧である希固という者が、両岸を築き、九間の高殿を設け、すべてに石塩木を用いたから、その堅さは鉄石のようで、表札を立てて「西新橋」と呼んだ。両橋の竣工が紹聖三年（一〇九六）六月であったから（ここに二詩を）作り（落成を祝う）云々。

〔考察〕『東坡全集』は、蘇軾（蘇東坡）が惠州に左遷された時、州の東西の橋を修復し、その竣工を賀して詠んだ漢詩（「東新橋」「西新橋」）の序。『東坡全集』では末尾が「畢工、作二詩落之」。

〔参考〕『東坡全集』は、北宋時代に活躍した蘇軾（蘇東坡）の詩文集。その版本（市立米沢図書館デジタルライブラリーにて公開）は、本文も該当箇所の数（卷二三）も一致するが、刊行年・刊行者は不明。

（平石岳）

閏中月

193 さすそとはけしきはかりの槓の戸を明て夜深き閏の月哉

あかしの巻。月いれたるまきの戸口、けしきはかりをし明たり。

〔出典〕雪玉集、一二九九番。源氏物語、明石巻、二五六頁。〔異同〕『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 閏の中の月

月の光が差しこむといっても少しだけである。少しだけ閉ざしておいた槓の戸を開けると、夜更けの月が寢室に差しこむなあ。

明石の巻。月の光の差し込んだ木戸口が、（光源氏を迎え入れるかのように）少しだけ押しあけてある。

〔考察〕『源氏物語』は、光源氏が明石の入道の期待に応え、入道の娘である明石の君を訪れた場面。光源氏を迎える準備が整っていることを、入道が槓の戸を少し開いておくことで表わしている。

〔参考〕「さす」に槓の戸を「鎖す」と月の光が「差す」を掛ける。

（平石岳）

194 秋かせにわすれし閏の扇をも月にたくへてまたやとらまし

〔出典〕雪玉集、一三〇〇番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 (寢室の中の月)

秋風が吹くと忘れられ、また飽きて忘れられた寢室の扇も、月になぞらえて、また手に取ってくれるだろうか。

〔考察〕「秋かせ」の「秋」に「飽き」を掛ける。「閨の扇」を月に見立てるのは、195番歌の漢詩による。当歌は月を愛でるように、忘れられた寢室の扇を手に取り愛でて寵愛が戻るだろうかと詠む。

(廣瀬薫)

月似扇

195おもかけは秋の扇のそれなからさも置かたき袖の月かな

班婕妤詩曰、新^ニ製^{シテ}齊^ニ紉^素ヲ、皎^ト絜^{シテ}如^ニ霜^雪。裁^{シテ}為^ニ合^歎ノ扇^ヲ、団^々ト^{シテ}似^ニ明月^ニ。出^コ入^君ガ^懐袖^ニ、動^揺微^風発^{シテ}、常^ニ恐^秋節^至、涼^颼奪^ニ炎^熱、棄^コ捐^{セテ}レテ^篋笥^ノ中^ニ、恩^情中^道ニ^絶シ^{コト}ヲ。

〔出典〕雪玉集、一三三六番。文選、樂府上、怨歌行、四七三頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。慶安五年(一六五二)版『文選』「班―班」「新製―新製」「皎絜―鮮絜」「裁為―裁成」「懐―懐」「涼颼―涼颼」。

〔訳〕 月、扇に似る

(月の)姿は秋の扇に似ているけれども、(秋の扇のように)放っておくことのできないのは、涙に濡れた袖に映る月だなあ。

班婕妤の詩によると、新しく齊の国の白絹で作ると、それは白く清らかでさながら雪や霜のようだ。それを裁つて合わせて貼った円扇を作ると、真ん丸で満月に似ている。この扇はあなたの懐や袖に出入りして、動かし

てあおぐ度にそよ風が起きる。（けれども）常に心配なのは、やがて秋がきて、涼しい風が暑さを吹き去らせると、秋の扇が箱の中に投げこまれるように、あなたの情けも途中で断ち切られることだ。

〔考察〕 出典は班婕妤の詩とされる「怨歌行」。班婕妤は漢の時代、成帝に愛されたが、やがて趙飛燕により寵愛を失う。「怨歌行」は班婕妤が、我が身の悲しさを嘆いて作ったもの。夏の暑さがなくなると忘れられる秋の扇に、自らの姿をたとえる。

（廣瀬薫）

山月入簾

196 こすのうちもあらはに見えて黛のみとりに匂ふ山のはの月

玉京記。卓文君、眉ノ色不_レ加_レ黛如_レ望_三遠山_一。時ノ人效_レ之号_三遠山ノ眉_一。

為長卿詩。小倉山ノ黛、当_レ簾ニ色、大覚寺ノ泉、落_レ枕ニ声。

〔出典〕 雪玉集、一二二〇番。記纂淵海、卷八一。河海抄、卷第八、松風卷、大覚寺事。

〔異同〕 『新編国歌大観』「こすのうちも―こすのうちにも」。『記纂淵海』「玉京記―傳記」「卓文君―文君」「号遠山眉―

画遠山眉」。『河海抄』ナシ。

〔訳〕 山の月、簾に入る

黛のような緑色に染まる山の端の月に（照らされて）、御簾の内側も露わに見えて。

玉京記。卓文君は眉に黛を付けず、遠山のようにうつつすらと青い眉であった。当時の人はこれに倣って遠山の眉と呼んだ。

為長卿の詩。小倉山の黛色は簾（の緑色）に照り映える。大覚寺の泉の音は枕元にまで聞こえる。

〔考察〕『玉京記』は詳細不明。『淵鑑類函』には「玉京記曰卓文君眉不加黛望如遠山」とある。「遠山の眉」とは、遠くに見える山のようにほんのりと青い眉。美人の眉にたとえる。当歌はそれを逆に用いて、山の色を黛のようだと詠む。

〔参考〕『記纂淵海』は宋の潘自牧が編纂した類書。『淵鑑類函』は康熙四十九年（一七一〇）に成立した類書で、日本に伝わりよく利用された。卓文君は漢の武帝のころ、恋に生きた情熱的な女性の典型として知られる。『河海抄』は「大覚寺の南に当たりて、滝殿の心ばへなど劣らずおもしろき寺なり。」（松風、四〇一頁）を注した箇所。菅原為長の漢詩は、「落枕波声分岸夢、当簾柳色両家春」（和漢朗詠集、下、隣家、五七五番、菅三品）に似る。

（加藤森平）

197玉すたれまさあけて見し峰の雪のおも影なからむかふ月かな

白氏詩。香炉峰雪撥簾看。

〔出典〕雪玉集、一二二一番。白氏文集、卷一六、香炉峰下新ト山居草堂初成偶題東壁、其三。

〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕（山の月、簾に入る）

白居易が玉簾を巻き上げて見た香炉峰の雪の情趣を思い起こしながら（簾を巻き上げて）眺める月だなあ。

白居易の詩。香炉峰の雪は簾を撥ねあげて眺める。

（加藤森平）

秋歌中

198 木幡山打こえてみればすむ月の千里もゆかん馬はなくとも

戦国策、卷三。秦昭襄王篇云、王良^カ之弟子^{シテ}駕^{シテ}云、取^{ニト}千里^ノ馬^ニ云云。

古文後集。雑ノ説、世^ニ有^ニ伯樂^ニ然^{シテ}後^ニ有^ニ千里^ノ馬^ノ。

〔出典〕雪玉集、七六八五番。戦国策、卷三、秦策、昭襄王、一二二頁。古文真宝後集、卷二、雑説、七六頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「打こえて―うちこえ」。『戦国策』『古文真宝後集』ナシ。

〔訳〕 秋の歌の中

木幡山を越えて見ると月が澄んでいる。（月が遙か遠く千里まで照らすように）千里でも行こう。たとえ（一日に千里を走れる）馬はなくても。

戦国策、卷三。秦の昭襄王篇によると、（有名な御者の）王良の弟子が、馬を車につけて、「一日に千里を走る良馬だ」と言った云々。

古文真宝後集。雑説に、世に伯樂のような馬をよく見分ける人があつて、それでこそ一日千里を走れる馬が見出されて存在するのである。

〔考察〕「千里馬」は、千里を一日でかける馬。すぐれた人材に例える。木幡山^{こはた}は山城国の歌枕。そのイメージは、「山科の木幡の山を馬はあれど徒歩^かより我が来^こし汝^なを思ひかねて」（万葉集・卷一一・二四二五番・人麻呂歌集歌）による。

湖月

199月柏やすむ秋こそ西の水うみやうへし柳も一葉おとしイのこらて

宋史、三百九十八列伝、九十七蘇軾伝曰、又取葑田積湖中、南北徑三十里、為長堤以通行者。吳人種菱、春輒芟除、不遺寸草。且募人種菱湖中、葑不復生。収其利以備修湖、取救荒余錢萬緡・糧萬石、及請得百僧度牒以募役者。堤成、植芙蓉・楊柳其上、望之如画図、杭人名為蘇公堤。

〔出典〕 柏玉集、八九五番。宋史、卷三三八（四庫全書）。

〔異同〕 『新編国歌大観』 「水うみやう湖に」 「おとしてーのこして」。『宋史』 ナシ。

〔訳〕 湖の月

月は澄んでいるかなあ。秋は西から来るが、西湖にかつて植えた柳も一枚の葉を落として（いるだろう）。

宋史、三百九十八列伝、九十七蘇軾伝によると、さらに葑田（マコモなどの水草が枯れて腐食し泥土になり、さらに干上がって田んぼ状になったもの）を集めて、西湖の中に南北長さ三十里に渡り積み上げて長堤とし、人の往来が出来るようにした。呉の地方では、人々は菱ひしを植えるが、春になるとマコモなどの水草を刈り取り、一本も残さないようにした（後、菱を植えるのである）。かつ、蘇軾は人を雇って西湖に菱を植え、マコモが二度と生えないようにした。菱を植えることで得られた収入（菱の実を売って得られた収入）は、西湖を浚渫する費用として備蓄し、飢饉救済資金で余った一万緡の錢と一万石の穀物、および政府に申請して得られた百人分の僧の度牒（政府発行の僧侶の出家証明書。僧侶の地位は政府管理で、度牒が無いと僧侶になれず、宋代の政府は度牒を売買して資金を調達していた）を使用して、浚渫作業の労働者を雇用した。長堤が完成す

ると、そこに芙蓉、楊柳を植えた。遠望すると絵画のように美しく、杭州の人は「蘇公堤」と名づけた。

〔考察〕『宋史』は中国の歴史書で正史の一つ。四九六卷。一三四五年に完成。宋代（九六〇～一二七九年）の歴史を記録した紀伝体の書。蘇軾は北宋の文人、政治家で、唐宋八大家の一人。「宋史三百九十八列伝」とあるが、宋史三百三十八列伝の誤りか。

〔参考〕「一葉」は舟にたとえることもある（133番歌、参照）。

（大杉里奈）